

教化活動と習俗

教化研究室

【目 次】

はじめに

I、日本における習俗の形成—近世・近代を中心にして—

II、伝統教団の教化活動の現状

III、教化活動と習俗の現状

IV、まとめ

はじめに

今年度の智山伝法院総合研究テーマ「密教と習俗」について、教化研究室ではサブテーマを「教化活動と習俗」として、次のような視点から取り組んだ。

(1) 近世・近代における習俗の変遷を概観する。

密教（仏教）と習俗との関係がどのように形成されてきたのかについて、近世の江戸期と近代における政治（権力）体制、社会構造の変化と習俗の変遷を概観した。また、日本の習俗の特質についても討議した。

(2) 伝統教団の教化活動の現状を考察する。

次に、総合調査を基に、伝統教団・寺院の教化活動の現状と問題点について考察した。ここでは、地方教化研究会で発表された靈障・葬儀など現実的な問題、他宗団の調査報告や研究などを参考にした。

(3) 教化活動と習俗の現状を具体的な事例から検討する。

以上を念頭に、「教化活動と習俗」の事例として①葬儀②祈願法要（護摩供）を取り上げ、つくしあい運動の考え方を含めて検討した。

①は、葬儀を密教的部分と俗信・その他とに分類することで、葬儀の内容・構造の実際を把握し、習俗との関わり方の問題を考察した。

②は、有名祈願寺院と一菩提寺の護摩供法要を比較し、そこに共通してみられる日本人の現世利益信仰とつくしあい運動で目指された密教的あり方とのギャップを考察した。

以上のような「教化活動と習俗」の考察から、一時的には教化活動の当面する問題点と課題、つまり教化研究室の今後の研究課題が明らかになると考えた。また総合研究の課題や密教の現代化への手掛けよりも見えてくるものと思われる。

これら教化研究室における討議の内容を、岡野が全体系的にまとめて論述する。

I、日本における習俗の形成—近世・近代を中心に—

現代の密教（仏教）と習俗との関わりは、近世江戸期と近代における政治体制や社会構造の変化に伴って生み出されたものの影響が強いと思われる。そこで近世・近代の習俗の変遷を概観し、密教（仏教）がどのように関与したかを考えてみた。

1、仏教の日本化（土着化）

近世江戸期は、仏教が民衆化した時代であるといわれる。初期においては、寺院が権力者から与えられた役割を担つて地域社会に組み込まれ、習俗を仏教的なやり方や形式を中心とした、支配構造を支えるものに変化させていった。そこには、仏教教団が権力と迎合し、民衆に教理や儀礼を押し付けるという構造が見られる。

一方、個々の寺院が地域社会の中核となるためには、地域の習俗とどのように関わるか、民衆の要望にどう応えるかという問題があつた。この問題に対しても、個々の場で、個々の住職・教師の努力によって、習俗との融合という形で解決が図られた。それは仏教の積極的な展開と考えられ、仏教の教理によって習俗に理論的背景を与え、目的達成

のやり方・形式として仏教儀礼が有効であるという観念を確立した。しかし地域社会への浸透は、同じ宗派に所属しながらも、葬儀や年中行事などの具体的場面では、地域によって差異があるという状況を生み出した。

また江戸中期以降の経済の発達は、民衆の金儲けや病気平癒などの現世利益への期待に、密教の加持祈禱が対応するという現象を隆起した。それは山岳（聖地）信仰と講組織の発達、靈場巡拝などさまざまな広がりをみせ、流行仏・流行神の隆盛をもたらした。

近代に入り、政治体制の変化に対して仏教教団が行つたことは、やはり権力との迎合であつた。そして武運長久や戦勝祈願など富国強兵策に伴う民衆の要望の変化にも巧みに対応した。一方、僧侶の肉食妻帯勝手タルベシの太政官布告は、寺院住職の定住と世襲化を招き、地域社会への土着を進めた。宗教法人法の制定は、寺院活動を保護する一方面で、住職・教師には国民としての義務（納税、兵役など）を課した。

このようにして、近世から近代にかけて密教（仏教）が土着していく中で、寺院は密教（仏教）の習俗化と習俗の密教（仏教）化という宗教的な二重構造と、国家による保護と国民的義務の遂行という政治的二重構造とをもつた存在になつていく。

2、習俗の日本的特質

近世・近代の習俗を概観する中で、為政者が政治体制を作り上げていくのに利用した信仰と、逆に政治権力では規制できなかつた民衆の信仰が見えてきた。

(1) 祖先崇拜は、近世江戸期と近代にかけて密教（仏教）儀礼による先祖供養、追善供養という形に再構成された。この祖先崇拜には、死者の靈が個性を保持している期間（三十三年乃至五十年）と、それ以後の没個性の先祖と

しての存在が想定されたところに特徴がある。そして恵みをもたらすものは崇拜の対象となり、災いをもたらすものは淨化すべきものとして追善供養の対象になってきた。

(2) 山岳信仰は、死者が先祖靈に昇華する聖なる場、恵みをもたらす山の神、大地の高まりとしてのパワーなど、いろいろな觀念が複雜に入り交じっている。特に山岳修行は、優れた驗力を身につけるものとして、真言宗・天台宗の僧侶、修驗道の行者たちに行われ、權力者も民衆も、その靈験に期待した。

(3) 靈信仰は、さまざまの靈が人間生活に影響を及ぼすという捉え方である。これらは、初め怨靈として恐れられたものが恵みの神に転化したり、不幸がなかなか回復しないと靈障の靈として死者供養や祈禱の対象になつたりと、生者の考え方でさまざまに変化するところに特徴がある。

(4) 身代わり信仰には、祈願者の罪業を消滅させてくれるというものと、災禍を代わって受けてくれるものがある。多くは觀音や地藏などの信仰の展開であるが、民間信仰として地方独特のものが見られる。

(5) 現世利益は、現在の生活が恵まれていれば維持を、そうでなければ回復を、神仏の加護や靈験に求める行為である。日本独特のものではないが、日本の宗教現象を特徴づける大きな要素である。

これらは日本の習俗の中核であり、さまざまな習慣的行為の目的となつているものである。

II、伝統教団における教化活動の現状

近世・近代の流れの上にある伝統教団の教化活動は、どのような現状にあり、どんな問題を抱えているのか。総合調査を中心とした現状を考え、さらに他宗団の資料を参考に、伝統教団全体の現状を考察してみた。

1、本宗の教化活動の現状

(1) 総合調査から

本宗の教化活動は、つくしあい運動の提唱によって一つの理念が示された。また、つくしあい運動は種々の具体的な活動を提案した。しかし運動は挫折してしまった。その原因や背景がどこにあるかを探るために、アンケート調査として「総合調査」が五年毎に実施されてきた。

(イ) 寺院の現状

総合調査の分析研究によつて、本宗の教化活動の現状は①先祖供養を中心とする②宗派色のない③年中行事が中心であることがわかつた。一方、毎月一・二度～毎週開催されるご詠歌や写経会などの研修会的活動は、実施状況が低い。平成二年度の総合調査で、新しく始められた行事・活動をみると、研修会活動や文書伝道はあまり推進されていないが、靈場の開設や靈場巡拝、水子地蔵・水子供養などの所謂靈障に関係する事業・活動は、盛んに展開されてきている。

(ロ) 檀信徒の現状

平成二年度の総合調査では、檀信徒に年中行事への参加、住職への期待、俗信に関する設問をした。

年中行事への参加は、寺院の年中行事の実施率と比例していた。また住職への期待については、特になしが四割強で、法話をする、檀信徒の相談にのる、境内美化、巡礼・団参の実施などがそれぞれ25～10%前後であった。

俗信については「厄年」「丙午・仏滅・鬼門・方位・方角」「靈障」をきいた。その傾向は①厄年については五割が信じている②丙午や鬼門などについては、昔からの風習だから従つが六割③靈障については、ある・ない・わからない

の三者三様に分かれているなどである。

檀信徒は、伝統的行事などには協力的であるが、住職独自の活動には関心が低く、俗信が根強いと考えられる。

(2) 地方教化研究会、布教師大会から

地方教化研究会では、真言宗の葬儀のあり方と、靈障の問題への対処はどうあるべきかが話題となつた。

葬儀については、例えば東北ブロックでは、檀信徒は近隣の大多数の曹洞宗による葬儀を葬儀のあり方として受け止めていることが報告されている。また埼玉ブロックや東京ブロックなどでは、人口流動や産業構造の変化に伴う寺院と葬儀社の役割のせめぎ合いが問題となつた。このように、葬儀は地方色が強く、独特の伝統に支えられていると同時に、社会状況の変化に伴つて問題も出てきている。

靈障の問題については、菩提寺よりも先に拝み屋や占い師に相談に行つてしまふ事情や、イタコなどの地方独特の習俗との関わりなどが報告された。さらに教義的な問題として、即身成仏なのに年回忌法要はなぜするのか、死んだ人の靈魂の在り様などの疑問も出されている。

また『これから寺院行事』で提案されている発心式、結縁准頂などが、定着・展開していないこと。写経会・詠歌講などの研修会活動について、檀徒の参加が少ない、参加者が固定化、高年齢化していることなどが問題として報告されている。

2、他教団が提示している問題

真言宗豊山派や曹洞宗の調査では、檀信徒が寺院に期待することは、葬儀・法事の執行であることが報告されている。また対象別・年齢別の教化活動の低調や、寺院行事に高齢者しか参加しないなどの問題が出されている。

天台宗では一隅を照らす運動が展開されているが、その運動主体となる会員組織は、住職・教師と寺族、檀徒の役員の範囲を越えられずに低迷している。

また日本キリスト教では、本来キリスト教には無い年回忌の要望が強いなどの悩みを抱えている。

3、教化活動の問題点

つくしあい運動は、村落社会の家制度を基盤とする先祖供養を中心の寺院活動では、かつて地域社会の文化・教育を担っていた寺院の発言力は弱まり、住職・教師は儀礼を執行するだけの特殊技能者でしかなくなり、苦悩からの救済という宗教的機能は新興宗教に求められ、寺院は都市化する社会において存在意義を失っていくという危機感から出発していた。

伝統教団の現状は、①住職・教師は、先祖供養を主とする伝統的な活動への依存度が高い②檀信徒の関心は、葬儀・法事や年中行事と寺院施設の護持などが中心③伝統教団は、社会の諸問題、諸現象に明確な対応を打ち出せていないなど、つくしあい運動が想定した危機的状況が、危機的状況として意識されないままに進行していることを示すものである。

ここには、住職・教師と檀信徒に共通する寺院の現状維持の意識、あるいは新しい活動を歓迎しない雰囲気のようなものが見られる。このような意識を生み出すものが何なのか、何によつて支えられているのか。これらの問題の要因、背景について、葬儀、祈願法要、つくしあい運動の三点から考察してみることにする。

III、教化活動と習俗の現状

1、葬儀の現状

教化推進資料第十三集「仏事の営み方とその意味」には、葬儀が大きく取り上げられている。これを葬儀の現状の代表例とし、文中の解説に基づいて、密教的に説明のできるものとできないものに分類して検討した。

(註) ◆印は『智山法要便覽』第一集の所載事項

密教的・仏教的	民俗、その他
①枕経 枕飾り	・北枕(釈尊入滅の北頭南面に習う)
	・小机、白布、
	・花瓶(花枝・榦)、香炉、燭台
	・逆さ屏風(曼荼羅・来迎図)
◆遺教経、涅槃経、理趣経等を 読誦して、経の功德を説話する	・顔面を白布で覆う ・膳めし(箸を立てる、水) ・守り刀 ・神棚の封紙 ・逆さ着物 ・忌中札

				②納棺
⑤葬儀	④通夜	③死装束	◆棺の底、蓋に梵字を書く ◆剃髪、授戒作法 ◆血脉を授ける	・遺体に梵字を書く 亡者五体布字、敷覆曼荼羅 ・湯灌（沐浴）
・四門行道 ・引導作法、戒名 ・讃経◆二箇法要、理趣三昧 ・歎徳文、諷誦文	・祭壇、十三仏掛け軸 ・讀経	・頭陀袋・経帷子 ・杖（◆金剛杖） ・数珠	・笠・三角紙・六文銭・手甲 ・脚絆・足袋・草履	・徹夜で遺体を守る ・通夜振る舞い
◆告別式 ◆門火				

教化活動と習俗

(6)出棺	(7)埋葬	<ul style="list-style-type: none"> ・遺体を花で飾る、釘打ち ・帰宅家の入り口で手を洗い、塩を振つて体を清める
(7)埋葬	(8)用具	<ul style="list-style-type: none"> ・葬式当日、五七日忌、七七日忌
(9)斎食		<ul style="list-style-type: none"> ・枕団子 ・位牌（仮位牌・野位牌） ・お清めの席

(1) 葬儀の内容

表を参考に葬儀の内容を検討してみると、以下の三つのことがいえる。

(イ) 行為、形式における二重構造

死装束の白衣や敷覆曼荼羅は死体を包んだ布の発展形であり、位牌は儒教儀礼のものに梵字を書くことで密教的に

なつてゐる。湯淮には、死者蘇生の祈りと密教的な湯淮頂の二つの解釈、香には精進と儒教の反魂の二つの意味合いがある。このように、一つの行為、一つの事柄に二重の意味付け、解釈ができる。

(口) 遺族、参列者の関わり方

遺族や参列者には、死者への哀惜の情、死者の罪業消滅・後生安穏を祈る心がある。しかし一方で、死体への恐怖や不淨觀があり、葬儀に関わることが身を汚すと考えられている。前者は引導作法や読經への期待になり、後者は葬儀後の塩や酒による清めという行為に表れている。また施主・遺族には、死者への思いと自分たちの社会的立場との二面がある。それは、戒名の格付け、葬儀の華美など、他人から見えるところへのこだわりとなつて表れてくる。

(ハ) 密教の役割

葬儀において、死者を引導作法によつて仏弟子となし、成仏・淨土往生に導く場面（後生安穏）と、住職の修行の力や読經の功德によつて故人の悪業が除かれる場面（罪業消滅）とで、密教は儀礼的な有効性を發揮している。それは裏返せば、日本人の祖先崇拜や靈信仰から展開されてきた行為に対し、密教が理論的裏付けを行つてきているといふことになる。

(2) 葬儀の変化

近年、葬儀にはさまざまな変化が起つてゐる。それは特に産業構造の変化と人口流動の激しい大都市圏において顕著である。地域独特的風習が消滅し、葬儀の取り仕切りは地域・親族から葬儀社に移り、火葬後に行われる繰り上げ初七日忌法要、日曜日に繰り上げる五七日・七七日忌明け法要などが一般化している。

葬儀の変化の許容は、後生安穏、罪業消滅への有効性を失わない範囲で行われ、実際のやり方については、施主の都合や要望と住職の考え方の合意点で決定される。そこで重視されるのは、死者や施主の社会的地位と経済力、最近の

葬儀の傾向ということである。したがつて葬儀の現状は、伝統的な形式と社会状況による変化とが混合したものになつてゐる。

(3) つくしあいにおける葬儀

では、つくしあい運動では、葬儀をどのように捉えているのか。教師向け『つくしあい手帳』をみると、葬儀に関する提案はなく、どのように死を迎えるかの最後の要心を問題にしている。つくしあいの生活の中で大日如来の世界を構築していくことが、如来とともに永遠に生きることであると提言されている。そこでは、死に向かつて自分がどう生きていくかが問題であり、その途上に他者の生死との関わりがあることになる。

(4) 問題点

葬儀は宗教的にも社会的にも二重構造をもつて展開されていく。そして死者と生者に関わる幾つもの二重構造を包含したものとして葬儀が存在する。つまり葬儀は、密教のみで展開しているものではないのである。むしろ檀信徒の「葬儀は密教的・仏教的儀礼で行われるもの」という習俗的感覚から、葬儀が寺院に持ち込まれているといえよう。では、大都市圏において顕著である葬儀の変化は何を意味するのか。歴史が示すように、習俗は社会の状況に応じて変化しつづけている。そして近年の生者の都合優先の変化は、日常生活から死が遠ざけられることを示すものである。労働と消費が中心の生活の中で、病院のベッドでの臨終によって死は隠されたものになりつつある。そこで死は突発的な出来事となり、つくしあい運動が提倡したような死を前提とした生の営みという宗教的命題は矮小化していくのではないか。新興宗教が幸福な生活と靈障との関係を説くのは、死者への畏敬というよりも、生者の幸福獲得という欲望を充足する手段として、靈がクローズアップされているに過ぎない。

すると施主や遺族にとって、葬儀の宗教性よりも対社会的なやり方としての習俗が優先されることになる。そのこ

とは已に戒名の格付けへのこだわり、葬儀の表面的な華美といった場面に表れている。また散骨灰や夫婦墓など、死者供養の断絶を意味する風潮も出てきている。

寺院の伝統的な活動への依存は、寺院と檀徒との関係が変化しないということを前提とした安定である。しかし、かつて寺院が地域文化の中心であった時代の寺檀関係は、家制度の崩壊と共に変化し始めている。

我々は、葬儀を見直すことで、これまでの習俗との関わりを考え直し、これからの中古との関わりを考えていく時期にきていていると思う。

2、祈願法要の現状

次に祈願法要の現状について、護摩供から考えてみる。本宗寺院における護摩供の実施率は⁷36%（昭和六十年調査）にすぎない。しかし本宗の大本山・別格本山は、いずれも護摩供祈願を主体とした有名寺院である。全国には、これらに団参する講社が多く存在する。これらの有名寺院は、初詣や節分には多くの参詣者でにぎわうが、その内容は如何なるものであろうか。また宗内の寺院には、恒例の行事として護摩供を行っている所もある。この両者を比較して、問題点を探つてみよう。

（1）有名寺院の場合

- ・初詣での参拝者数は、毎年ほぼ一定している。
- ・節分などは、有名人の参加などで参拝者が増加する。
- ・初詣でといつても、一ヵ所よりも数箇所に参拝する人が多い。
- ・参拝者は、①御利益があるといわれる②ネームバリューのある寺③友人、知人から誘われた④厄年だからなどを参

挙の動機にしている。

- ・講社の講員の祈願は、家内安全と交通安全が多い。
- ・その寺の本尊を知らなかつたり、寺か神社か区別がついていない場合もある。

※注――以上は、筆者の寺院にある二つの有名寺院の講社の講員五十名への質問調査に基づく。
(2) 菩提寺の護摩供の場合(埼玉県の一寺院の例)

- ・檀家のほとんどが護摩祈願の申し込みをする。
- ・菩提寺との、或いは世話人とのお付き合いの感覚が強い。
- ・祈願の内容は、80%が家内安全である。
- ・祈願の申し込み者は多いが、参加者は総代・世話人と若干の檀信徒であり、檀徒全体の半数にも満たない。
- ・厄年、当病平癒などの祈願者は参加する。

(3) 両者の比較

①祈願の内容

両者を祈願の内容で比較してみると、家内安全が多いという共通点がある。この家内安全の祈願は、個人ではなく、家族全体の現状維持や平穀無事に向けられている。

一方、厄除け祈願は、菩提寺よりも有名寺院への期待が大きい。この点では、交通安全の祈願も同様である。つまり将来の不幸を避けたい場合には、御利益や靈験が宣伝されている有名寺院に安心を求めるのである。

また不幸の回復としての祈願、例えば当病平癒などについては、御利益や靈験があると聞けば、有名・無名に關係なく、いくつもの寺院で護摩供・祈願をするということが見られる。

このように、護摩供祈願の内容は、祈願者の側の幸福追及や幸福回復への要望によつて決定されている。

②祈願者の姿勢

法要への参加という点では、有名寺院と菩提寺とでは大きな開きが見られる。参加するかしないか、どの寺院に参拝するかの動機は、どんな願いを、どれだけ書いてくれる本尊かということにある。また自分の願いが、幸福を延長する手続き的なものか、病気などの不幸からの回復を求める切実なものかによつても、法要への参加が異なつてくる。

③寺院の姿勢

本尊の加護を説くという点では、両者は共通しているが、特定の利益や靈験は、有名寺院において強調される。厄除け、商売繁盛、大漁満足、安産成就など、それぞれの寺院が特色を出している。これは、民衆の要望や社会状況に対応してきた結果であると考えられる。年中行事として執行することに腐心してきた菩提寺の護摩供と、有名寺院の護摩供とでは、祈願の種類に大きな差を生じている。

別の言い方をすれば、民衆の要望や社会状況に応じて、祈願の項目を増やしてきたのが、護摩供祈願の歴史的流れの特徴ともいえる。

(4) つくしあいにおける護摩供祈願

では、つくしあい運動では、護摩供祈願はどのように考えられたのだろうか。

つくしあいでは、護摩供を「全身全靈を、いのちの純粹なはたらきに統一してじかに如来に迫る、すなわち如来との加持感應を、まあたりに体現する行法」と意義付けた。そして護摩供祈願の功德は、狭い自我に陥っていることによる自縛を、加持祈禱によつて解き放ち、心を開けば、たちまち如来との感應が生じ、靈験が現れることであるとしている。(教師向け『つくしあい手帳』100頁)

檀信徒に対しては、「本尊さまに帰依し、ご祈禱に自分のすべてをうちまかせて、そこに生きる」という信心の方を呼びかけ、「この信心と努力とが持となり、本尊さまのご誓願の加と感応し、さらに自分をささえるあらゆる力が授けられて、願いが達せられる道が開ける」という利益を示している。(前掲書102頁)

つまり、つくしあいでは、伝統的な教理に基づいて、護摩供祈願の法要を加持感応の世界を現出するものとして、本尊への信心をもつて、自己を高める努力をしていく誓いを新たにすることが、法要参加の功德であり、そこで獲得されていく積極的な生き方が、具体的な利益であるとしている。

(5) 問題点

つくしあい運動が提唱する護摩供のあり方が、密教的な教理の世界観の展開であるとすると、護摩供祈願の現状は、伝統的な教理から掛け離れていくことになる。

つまり、護摩供には一見密教的な振る舞いが表現されはいるが、その内実は檀信徒側の現世利益の要望が優先し、信仰の発露としての護摩供への参加ではなく、習俗としての面が強いが、祈願の内容に檀信徒が抱える問題が浮き彫りになつてきていると思う。

つくしあい運動では、如来の世界観を構築するために、檀信徒のもつてゐる信仰や要望をどのように扱うかは明言されていない。しかし、要望に表れる檀信徒が抱える不安や問題を無視せずに検討していくことが、教化活動と習俗の関わりを考えいくことになるはずである。

IV、まとめ

これまで、教化活動と習俗について、歴史的場面と現状から問題を考えてきた。習俗の歴史的変遷では、政治体制や社会構造の変化に伴つて習俗も変容していくこと、そこに密教が積極的に関与していたことなどがわかつた。また葬儀や祈願の現状からは、教義的儀礼的な二重構造や檀信徒とのギャップなどが見えてきた。これらをまとめるに、次のような事項が教化活動と習俗との問題として考えられる。

(1) 習俗との関わり方

習俗の根強さは、一つの対象や対社会的にはこれをしておけばOK、大丈夫だという機能重視にある。そこでは、行為、形式の意味付けは臨時の教理的な統一性はない。逆に教化活動では、教理から導き出される理念にそつて、一つ一つの行為が自らの開発を目的として構築されていく。この習俗と教化活動とのギャップから、教化活動がどのように習俗に関わるかという問題が生ずる。

(2) 伝統的教理と現実の問題の乖離

葬儀や祈願（護摩供）法要の場面では、形式・やり方・習慣などが重要視され、檀信徒の要望や都合への対応がなしうれし的に行われ、つくしあい運動で試みられたような密教の教理で示される世界觀は展開されていない。なぜなら、寺院の現場の問題が、住職・教師によつて教学に饋還する問題として検討されていないからである。この教理と現実との乖離についてどう考えていくかが、重要な課題である。

1、教化研究室の考え方

以上の二点について、これまで教化研究室が提案してきたこと、またこの一年間で討議された内容から考えてみる。

(1) 習俗との関わり方について

習俗との関わり方については、葬儀などを習俗ではなく、信仰形成の出発点として捉え直すと、いくつかの方法が考えられる。①習俗は習俗としておいておく、云わば習俗と関わらない②現状で行われていることに対する新たな教理的意味付けをしていく③習俗として行われていることで、密教的・仏教的意味のあるものは残していくなどである。

二番目の例として、教化推進資料十四集『祈願と十三仏信仰』において、精霊の供養に比重をおくのではなく、十三仏と精霊が縁を結びあうという重大な意味に着目し、葬儀・法事を精霊と遺族・生者と十三仏とが一体となる、聖なる場として意義つけた。この十三仏信仰という云わば俗信に、教義的解釈を施して、さらに密教的あり方の実践を加味していく、段階的な関わり方ということになる。

三番目は、意味があるということをどこで分けるかが問題になる。その基準を仏教的な説明のつくもの、罪障消滅の手段、あるいは祈りの対象として通用しているものなどを条件としてみると、例えば葬儀では枕飯、逆さ屏風、湯漬、死装束、位牌、斎食などが入ってくる。

(2) 教理と現実の問題との乖離について

この問題は、現実の問題を抱える住職・教師の側から、教学の研究者に問うていかないと解決しない。そのためには、真言宗の教理に基づく世界観を現代社会の中で構築していくという観点から「現場の教師と教学の研究者が共通の問題を語り合うシステム、研究会の設定をしてはどうか」と、平成二年度の第二回公開討論会『数学は生きる支えを与えてくれるのか～教化の本來的意味～』で提案している。

そして研究会の場に載せるためには、現実の問題を整理して、住職・教師が抱える問題とを分類し、また共通点も確認しておかなければならない。その一環として、昭和六十三年度から平成二年度にかけて七回の地方教化研究会が開催された。また平成四年度は全国教化研究会が行われている。

平成二年度の総合調査では、寺院と檀信徒を結ぶ要素だけでなく、檀信徒の俗信についても問うている。これもまた、現実の問題を把握する試みである。

これらから浮かび上がってくる問題は、単に教化、教学という問題ではなく、宗団全体が解決を迫られている問題ということになる。

2、今後の課題

教化活動と習俗を検討することで見えてきたことは、習俗は檀信徒の中に集積された根強い幸福追及の具現であり、檀信徒が抱える問題が様々な場面に表出したものであるということであった。そして、習俗とどのように関わるかが教化活動の課題になるわけである。

その課題として、葬儀のあり方ということが考えられる。寺院の現状は、葬儀と法事が活動の中心である。その最も依存度の高い活動にこそ、大きな問題が隠されていた。それは地域の習俗の中の死者儀礼と融合し、儀礼と理論的根拠を与えることで村落社会の宗教的機能を担いながら、社会に組み入れられた故に、次々に起こる現場の問題への即応を余儀なくされ、伝統的教理の展開ではなく、先祖崇拜や靈信仰を背景とした檀信徒の要望に臨時に対応するという体質をもつてしまつた。それは行つていることを確認する、あるいは本來的意味を見直すという自己診断の機能を失わせた。それが結果的につくしあい運動を頓挫させる要因の一つになつたのである。

地方教化研究会での話題は、一つには靈障の問題への対応であり、二つには葬儀・年回忌法要に関するものであつた。どちらも日本人の祖先崇拜や靈信仰への対応を迫られる問題であつた。そして討論は、葬儀のあり方に集中した。このことは、先祖崇拜や靈信仰と密教がどう関わっていくかという問題が、これまでの寺院の活動では解決できないう事態になつていて示している。この問題を検討しなければ、現状から先へ進めないということである。

施主と菩提寺との関係は、葬儀を契機としていることが極めて多い。そこで、葬儀を信仰の出発点という観点から問い合わせ直し、これから葬儀のあり方を討議していくかねばならない。

それは、地域社会での寺院のあり方を問い、靈と密教との関わりが厳しく問われることになる。それは、真言宗が社会にどのように働きかけるか、どのような発言をしていくのかという問題にもなっていくのだと思う。

【主な参考文献】

- 【主な参考文献】

 - ◇『教化推進資料』 13・14・15・16集
 - ◇地方教化研究会報告『現代密教』 2～4号
 - ◆現代宗教学2『宗教思想と言葉』 東京大学出版社 927,15,
 - ◆『神と日本人』 村上重良 東海大学出版会 849,25,
 - ◆『葬と供養』 五来 重 東方出版 925,20,
 - ◆『仏教と民族宗教』 伊藤唯真 国書刊行会 S59,9,30,
 - ◆『日本の近世』 1～10 中央公論社 916,20～931,10